

幕内瓦版 第四号

発行 日本劇場技術者連盟

巻頭言

副理事 山形 裕久

今「人の話の内容を理解して、返答しなさい」と、部下に話し掛けている自分がいる。自分が過去に先輩諸氏から、拝聴した言葉の一部である。

時はめぐり年輪を重ねたが、当時と大きく違う点は、アナログからデジタルへの技術力の過激なまでの進歩である。打合せ時の技術的会話の流れが、思い出話しになったりすることも度々ある。

今、舞台芸術創造の現場は、アナログと現デジタルの2世帯同居で構成されているが、平成生まれの完全デジタル人が現場に顔を出すと、3世帯同居の現場になる。

舞台芸術の伝承、舞台技術の継承、裏方としての心根、精神論、各持場での様々な思考の違いや年功序列と実力主義が入り乱れる。自身も間違いなく継承したのか不安になる中で、「日本劇場技術者連盟」が何かを提供するのではなく、皆さんの思いや意見を集約し、技術者の地位向上と資質の維持等に、重層的に寄与し、会員の方々の情報交換の場として広く活用されると共に、関係各所に発言力ある団体として確立したく考えます。

共に、協議し構築と確立を目指しましょう。
(大阪・貝塚市 コスモシアター)

TEEC加入に際して

北海道：坪田栄藏

この度、日本劇場技術者連盟に加入させていただき、ありがとうございます。

私は地方の小さなホールに勤務経験のある公務員で職種は事務職です。しかし、アマチュアながら管楽器を演奏しており、その経験から以前よりホールの運営のお手伝いをしていましたので、ホール勤務の際は躊躇することなく袖付きで舞台管理をやっていました。

音響・照明の技術者は委託でしたので、その部門を担うことは殆どありませんでしたが、それらの方から専門的なことを勉強させていただきました。また、それぞれの部門の団体の存在を知り、加盟もさせていただき、舞台にかかわる多くの事を学びました。

そして、音響・照明技術部門では技術認定制度がありますが、舞台管理部門でもそのような制

度の確立を望んでいたところ、この度TEECの存在を知り喜んでるところです。

ここ数年自治体では財政難から、施設（ホール）運営費を少しでも抑えようと、安易な指定管理制度の導入が進められています。また田舎のホールでは技術者の認知度が低く、実際は技術を持たない業者に委託がされたりして、ホールの環境は非常に危険な状況にあります。ぜひメンバーの一員として、認知度を向上させられるようがんばります。

また、私自身も技術向上のため、できる限り各種講習会へ参加したいと思います。よろしく、お願いします。

困った現象

宮崎県：出井稔師

私の所属している会社で指定管理を受けて管理運営しているホールは、今年で5年目になります。街の賑わいを取り戻そうと、微力ながらも私たちが知恵を絞ったことで、街中に人々が戻ってきています。

しかし良いことばかりではありません。人が多くなると、そこに社会のルールをちょっとはみ出した若者達も集まってきます。

私どものホールと隣り合わせにデパートがあるのですが、この通路に若者たちがたむろをはじめたのです。この通路は、駐車場からデパートに通じている一番人通りの多いところ

です。最初は数人でしたが、夏休みになると中高生が加わり数十名ほどになり、この通路を利用するお客様からの苦情は以前にも増して多くなり、警察の出動も毎日のようになっています。

ときにはバイクの爆音を轟かせ、ゴミをまき散らし、駐輪場の自転車を破壊します。警察が出動すると蜘蛛の子を散らしたようになくなりますが、しばらくするとまた戻ってきます。他の街でも同じような事例があります。

若者たちの集う場所がないのでしょうか、困ったものです。どのような対応すればよいのか思案中です。

どなたか知恵をお貸しください。

■新宿コマ劇場見学会

2008年10月8日(水) 14時~16時

13時45分までに劇場正面に集合

会費500円

申込先 → FAX.042-361-8982

60の手習い、ひっそりと楽しむ
東京都：山田四郎

61歳を還暦というが、これは60歳で干支が一回りして元に戻るといふことらしい。そのせいか60を過ぎると、いろいろなことを学びたくなる。これまでの仕事とは違うことに興味を抱いたり、これまでのおさらいをしたり忙しい。

私はいま、40年もの間じっくりと勉強もせず走り続けてきた伝統芸能の入門書を読みあさっている。歌舞伎の入門書の数は沢山あるが、その道のベテランや俳優が書いているので、独特の業界用語が多く、これでは一般の人は分かり難いところが多い。

父・観阿弥の遺訓を世阿弥が纏めた「風姿花伝」を読んでみた。世阿弥が30代後半に書いたもので、苦勞と苦惱の末に悟った芸道を説き明かしている。

以下のように、年齢に適した稽古法を論じているが、これは現代にも当てはまる教育論であり人生論としても通用する内容である。

- ・七歳から稽古を始めるのがよいが、事細かく教えないで、自然にまかせ自由にやられたほうがよい。口うるさくいうと嫌気がさしてしまうからで、子供には基礎だけを教えて、それ以上のことをさせないことが肝心である。
- ・十二、三歳頃は、内容も理解し始めるので、徐々に多くのことを教えてよい。華やいだ美しさのある美少年の年頃であるから何をやっても評判がよいが、まだ本物の花ではなく完成品ではない。年齢にふさわしい芸をさせて、一方、ひたすら基礎を丁寧に学ぶべきである。
- ・十七、八歳頃は、稽古をしすぎないように注意する。声変りの年頃で、成長期により体つきも変化して不安定な形になるので、華はなくなる。この時代を過ぎた後から本当の芸道に進むのであるから、焦らず、無理をすべきでない。
- ・二十四、五歳頃は、声と体形も安定してきて、一生の芸の形がこの時期に決まってしまう。ここから徐々に全盛期に向かって本格的な芸を磨くのである。新人ゆえに物珍しく人気ものになるが、ここで有頂天にならずに、先輩の教を素直に聞き入れて正当な稽古に励むべきである。
- ・三十四、五歳頃は、全盛期である。この時期に万全の芸域に達すれば、一流の芸能者として通用する。この絶頂期に「真実の花」を咲かせなければおしまいである。芸の進歩は三十四、五歳までで、それまでに芸を窮めなければならない。
- ・四十四、五歳頃は、オノレを悟る時期である。オノレの身の状態を認識し、今どうすべきかを読めるのが真の名人である。いつまでも若いものと競わずに、新しいことに手を出して晩節を汚してはいけない。老いたならば潔く後進に道を譲り、自分は芸の深みを大切とする年齢相応の演目をやるべきである。

・五十歳になったらなら、何もしないのがよい。華やかな役も手柄も後進に譲って、自分は老木に一輪の花をひっそりと咲かせるごとく、一歩引いて目立たないようにすることが肝心である。引き際の美学である。このことを世阿弥は「麒麟も老いては驚馬に劣る」ということわざで表現している。麒麟は俊才の意。

これらを私たち舞台技術者の教育に当てはめて読んで面白い。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

人物クローズアップ

舞台美術家 滝 善光

Q 映画の世界から入門されたのですか。

滝 デザイン学校を出て最初に就職したのが、大映映画多摩川撮影所です、永田ラップで有名な永田雅一の大映が倒産し労働組合が運営していた時期でした。私が大映に入ったのは映画美術が好きで望んだ訳ではなく他に就職先が無かったからなんです。

今も御茶ノ水にあります東京デザイナー学院という専修学校に入学しました、インテリアデザイン科ディスプレイデザイン専攻だったので、ほとんどは舞台美術ゼミで舞台美術を勉強していました。このゼミの吉田先生が元東宝舞台のデザイナーで、他にも村山装飾舞台（現、株式会社ムラヤマ）などでも仕事をしていました。実際に帝劇のバックステージなどを見せてもらおうと、“もうこれしかない”という感じでのめりこんでいきましたが、いざ就職となるとなかなか舞台の仕事はありませんでした。学校の就職課にも当時はそんな業界の求人はありませんでした。そんなとき同級生の叔父さんが大映の大道具さんということを知りコネで入れてもらいました。

撮影所時代は美術部に入りましたので映画美術を基礎から教えてもらいました。図面の線の引き方から植木の植え方まで、なんせ所内には歴史を含めてすべて有りますから、柱、壁、建具、小道具、切文字看板、電飾、置き道具、車両、植木など、舞台なら外部発注するものも所内でほとんど出来上がってしまいます。ここで本編やCMの美術助手をやっていました。撮影所で映画美術を一通り覚えたのでその後、国際放映や東宝、東映などでも単発で仕事をするようになりました。

当時撮影所では、いろんなことにスタジオを貸し出していて、芝居なんかもやっていたんです。1975年に「唐版 滝の白糸」上演のために第5スタジオ貸し出すことになりました。作・唐十郎、演出・蜷川幸雄、美術・朝倉撰、照明・立木定彦、主演が沢田研二でした。私は吊り2重の上で雨を降らせる係りでしたが、長屋が続いていく朝倉さんの美術は見事でした。このとき

ですか、やっぱり舞台やろうかなって思ったのは。テレビはあとの時代になります。

Q 劇団の研究生の時代もありましたね。

滝 撮影所に入出入りしていた大道具さんのなかに青年劇場の大道具さんがいました。このひとについて劇団に入ったわけですが、まあ最初は研究生ですよ。東京公演をやった後、旅公演に連れて行かされるわけですが学校公演でして、市民会館や公会堂、学校の体育館でも芝居をやりました。8月の末に東京を出て帰ってきたのがクリスマスで、2学期丸々公演していたわけです。私の仕事は舞台監督助手兼トラック運転手でした、毎日小屋がかわるわけですからいい勉強になりました。道具の置き方や照明の当たり方、いずみたく作曲のミュージカルだったのでテンポも速く、役者の導線確保なども覚ええました。

その後、劇団員3人と立川に「シアター2+1」という劇団を旗揚げしたんですが、現在にいたるまで劇団員と研究生の力関係はつづき今でも「滝くん」ですからね。

Q 著名な舞台美術家のもとで修業もされています。

滝 当時の劇団は給料も無く、ギャラもステージ制でしたので公演がないとつらいものがありました。大映時代の貯金も底をつきましたので、いっそマツウな仕事に就こうと新聞の求人欄を追いますと、「明治製作所・店舗、ディスプレイ」とありますので作品を持って新大久保の本社まで面接に行くことにしました。多少なりともその道の勉強はしてきましたから。

人事担当の面接のかたは「あなた舞台美術がやりたいんじゃないの？」私の作品が舞台だけでしたから当然ですよ、そのあとに担当者は「この親会社は明治座なんです、そこ紹介しましょう」

そんな訳で明治座に面接に行くのですが、明治座も今は募集していないとか。で、担当者の紹介でその月に掛かっていた芝居の美術家である吉田兼吉先生を紹介され、無事、吉田兼吉舞台美術研究所に入所できました、そのうえ仕事もないだろうからと国立劇場の金井大道具まで紹介していただきました。吉田研究所では舞台美術の基礎、考え方や日本建築などを教えていただきました。私は末端でしたが多くの先輩達とのつながりは今なお続いています。

しかし吉田先生も90歳近い高齢で仕事も少なくなっていましたので、他に師事したいひとがいるなら紹介しましょうとのことで、劇団四季の金森馨のもとに移ることになりました。

当時の金森さんの仕事のやり方として、四季の仕事は四季のスタッフで行い、表の仕事、東宝や松竹、ヤマハなどは金森コーポレーションのスタッフで行っていました。私は金森コーポレーションの居候的な存在でしたが、数多くの現場を見させていただき、また図学に元

づくパースの書き方や図面の描き方を教えていただきました。このころ朝倉撰のA、金森馨のK、高田一郎のTをとって「AKT」という勉強会があり、我々新人もセミナーなどに参加させてもらいました。金森さんのことを話すと長くなりますので今日はこのへんで。

Q 日本舞踊でも活躍されていますが、いつごろからですか。舞踊家のことを考えてデザインしていらっしゃるようですが。

滝 日本舞踊の美術をはじめたのは30歳すぎぐらいからです。このころはテレビ東京の「おはようスタジオ」やニュース番組の美術をしていました。テレビ東京の子会社、株式会社ACTという会社ですが、これも吉田兼吉美術研究所の兄弟子の紹介です。

国立劇場でアルバイトをしていた時代に劇場の美術家、碓山喬康さんと知り合いになり花柳昌生（現、昌太朗）を紹介されまして、乱舞座の旗揚げに関わったのが日本舞踊の舞台美術の最初です。そのころはケレン味の多い作品でしたが最近では枯れてきましたね。やっとなの空間がわかってきたような、明かりもほしくないときもあります。

突然ですが遠近法には3つの要素がありまして、一つは「大きさ」遠くのは小さく見えます、二つ目は「空気」大気の厚みで遠くのは青みがかって色調は明るくなってきます、3つ目は「明瞭度」遠くのは細部が消失し明瞭さにかけてきます。

劇場の8間程度の距離に現実的な数キロの距離を表現するには、底に行くにしたがってタッチを荒くします。照明が入り客席から見るとはちょうどいいんですが、舞台上の立ち方さんからは雑に見えてしまうんですね。最近ではビデオを重視するかたも多いんです、背景は多少ぼかして色彩も落としたほうが、立ち方が映えると思うんですけどね。

Q 舞台美術家は、きちんとした仕込み図を描くべきであるという主張のもとで、その基準を設けるべきだとのお考えをお持ちで。

滝 舞台美術家は自分のアイデアを現実化するために行動します。アトリエ公演のように時間と空間が自由に使えるなら自分ひとりで創ることも可能ですが、劇場やホールを使う場合は大勢の人の助けを借りなければなりません。その人たちに自分の考えを正確に伝えるには図面しかありません。自分の気持ちを他の人に伝えようとするとき人間は言葉を使います。図面は設計者と製作者とを結ぶ共通言語なんです。しかもISO（国際標準化機構）というものがあって世界共通言語なんですよ。また図面をかきながら設計者は多くを創造することができます、アイデア倒れで終わらないためにも舞台美術家は正確な図面を描くべきですね。

③ Q 連盟をどのように活用して行きたいですか。

滝 やはり技術者同士の横のつながりを大切にしていきたいですね、わたしもホールの管理の仕事をしていますが、外部業者でも知っている人がくれれば安心できます、その人の技量がわかりますからどのくらいサポートすればよいか判断できます。同じように私が他の劇場で仕事をする場合でも私を知っている方がいれば足りない部分を補っていただけると思います。あまえているように聞こえますが、初めての劇場で仕事をするときの緊張感はやってみないとわからないと思います。地方の小屋に行くと知り合いがいるとホッとしますから。

Q とても素敵な入門書を出版されていますね。
滝 出版のきっかけは丸茂電気が発行していますマルモニュースなんです、ここに日本舞踊の仕込み方の特集を書きましたら、丸茂電気の入っていないホールからの問い合わせがかなりありました。それを聞いてマルモニュースを編集している出版社から邦楽をメインにした本を書いてくれないかとの誘いがあり書き初めたんですが、しばらくして、日本にはホールが2000しかない、このままでは2000部で終わってしまうので一般や学校にも売れる内容に変更してくれないかとの要請が編集者からありました。そんな訳で私が30年やってきて、たぶんみんなが知りたいんじゃないかということをもとめて本にしました、入門書というよりも図鑑のように好きなページからみてもらえたらいいと思っています。図解とあるように300枚ほどの絵と写真、図を入れましたので分かりやすいと思います、また編集者のこだわりで、どのページをひらいても絵か図がでるようになってます。おかげでPhotoshopはかなり使えるようになりました。
《舞台美術の基礎知識・レクラム社から出版》

Q 学校でも指導されていますが、新しい発見もあったのでは？

滝 3年前から北区の王子にある専門学校中央工学校というところで週に2日舞台美術を教えています。この学校は建築科がメインで来年創立100年になる名門なんですが認知度は低いですよね、私も知りませんでした。人に教えるということは自分も勉強になります間違いを教えるわけにはいけませんから、劇場の歴史なんかはずいぶん調べました、日本の舞台はある程度知っていましたが西洋になると確信がありませんでしたからね。調べていくとシェイクスピア時代のロンドンと京都七座の時代背景が同じようなので驚かされました。また、この中央工学校は建築教育に優れていて図面の書き方、投影図と透視図、CAD製図などにも豊富な講師がいてわからないことがあると私も教わっています。

Q 現在はホール運営のお仕事もやられているようですが。

滝 パルテノン多摩は、多摩市文化振興財団が多摩市より指定管理の委託を受け、ホール運営は株式会社フラットステージが担当しています。私はフラットステージに所属し月のうち10日ほど出社して舞台運営にあたっています。1,440席の大ホールと300席の小ホールがありまして稼働率は70%ぐらいでしょうか。ここに来る前には、新宿の朝日生命ホールにいましたがバブルのあおりで閉館となってしまいました。新宿もここも同じですが舞台にいと常に新しい発見があります。ロックバンドのステージから日本舞踊のヒントがあったりします。最近では映像機器のつかい方に考えさせられることも多いですね、LEDなどはスタッフに値段を聞いてしまうこともあります。私が絶対、観にいけないようなアイドル系のバックステージまで見られるんですから小屋付きはやめられませんか。

このところ東京では、日本舞踊公演のできるホールが相次いで閉館に追い込まれています。朝日生命ホール、ABCホール、日刊ホール、イノホールなどです、学校教育に邦楽が組み込まれた現在、発表の場が失われていくというのもなんかおかしな時代ですね。

Q 人生とは人とりつながりなんですね。

滝 そうですね。今回話したように私の人生はすべて人のつながりから成り立っているようなものです。東京デザイナー学院からはじまり、大映映画、青年劇場、国立劇場、金井大道具、吉田先生、金森さん、テレビ東京、朝日生命ホール、レクラム社、中央工学校、フラットステージ。このすべてに仲立ちしてくれた人が居たわけです。感謝しています。

Q 滝さんのお話で、みんな元気になります。ありがとうございました。

■会友の動向

携帯抑止装置テレ・ポーズの製造販売をしている株式会社マクロスジャパンのテレポーズ事業部門は、分社化して株式会社テレ・ポーズを設立。株式会社春日電機の完全子会社となった

■イベント案内

楽器を知ろうシリーズ～バイオリン編

実際に楽器に触れてみたり、レコーディングとSRの実験もいたします。

- ・2008年10月24日(金)、13時開講
- ・府中の森芸術劇場ウィーンホール
- ・受講料：3,000円

詳細インターネット検索 → [日本音響家協会]

発行 日本劇場技術者連盟

発行人 齋藤 譲一

編集人 八坂賢二郎

発行日 2008年9月20日

幕内瓦版 第五号

発行 日本劇場技術者連盟

■巻頭言

もう二月も過ぎ去ってしまいました。こんなに速く過ぎ去る殺伐とした社会情勢の中、観客に夢と希望を与えようとしている私たち舞台人だけでも、なんとか‘心のゆとり’を持てたらと思わずにはいられません。

そこで何かをしていかなければ？という問いのもと、TEECでは自己啓発を含め7度目の催しを開催しました。舞台の専門分野を持ちながらも、劇場の全部門に精通した人材になることがTEECの目指すところです。未知の事々に出会っても、細かい事には拘らず大筋の方向を間違えずに捉えられれば、少々違っていても物事は正しい方向へ行くはずで。

これからも設立趣旨にのっとり、相互に成長していけるよう、関係各位のご協力、ご支援をお願い申し上げる次第です。

【連盟副理事長・小坂部恵次】

■事業報告

◎新宿コマ劇場さよなら見学会

今年で閉館する東京・新宿コマ劇場の見学会は、2008年10月8日、日本劇場技術者連盟と日本音響家協会が開催いたしました。

このイベントは、コマプロダクションの風間典年さんのご尽力で開催できたもので、神村和彦さんのご案内で、劇場の隅々まで拝見し無事終了いたしました。

参加者は仙台から宮崎まで、全国各地の方々50名程でした。(担当・高橋三十四監事)

◎大阪フェスティバルホールさよなら見学会

2009年1月21日、昨年末で閉館となったフェスティバルホールの見学会を実施しました。舞台芸術の殿堂として君臨したホールへの感謝の気持ちを込めて、山形副理事長が中心となって企画したものです。

本連盟と日本音響家協会西日本支部が共同で開催しました。(担当・山形裕久)

◎劇場運営のチカラをつけるゼミナール「能楽の研究」

標記のイベントは、2009年1月26日(月)、東京・千駄ヶ谷の国立能楽堂大講義室において13時から開催しました。

はじめに映画「国立能楽堂の建設」の鑑賞を鑑賞し、建築設計の意図を理解したところで、実際の舞台と楽屋を見学しました。

能楽堂の構造を理解した後は、能楽評論家・児玉信氏による講演「能の神髄・世阿弥の美学」に移り、スライドやVTR、DVDを駆使して、過去のさまざまな公演形態を学び世阿弥の心を探りました。

次に、映画「能楽入門・隅田川」の鑑賞して能の標準的な形を学んでから、国立能楽堂企画制作課長・猪又宏治氏による「能楽の企画制作」の講演です。一般の入門書には掲載されていない現場のノウハウを学ぶことができました。

予定時間どおり5時に終了し、5時30分からは会場を代々木の和民に移して新年会を開催して、情報交換をいたしました。

このイベントは、日本音響家協会東日本支部の共催、日本演劇協会の協賛で実施しました。
(担当・齋藤譲一)

◎桶川市・劇場技術者技能検定報告

2009年2月3日～4日、埼玉県・桶川市民ホールにおいて、第1種劇場技術者検定講座と市民のための第3種劇場技術者検定講座を実施しました。

本連盟の実施趣旨は、市民と共に学ぶことであり、公共ホールの運営を円滑にするために市民とプロの技術者が同一方向を向いて進むことが大切であると考えからです。

安全業務は、知識だけで叶うことではありません。基本的な技能と作法をしっかりと身につけて、先人の教えを正しく受け止めて、舞台全体の動きを把握して作業に取り掛かることです。今回も全国から、志の高い方々が大量参加されました。学習だけでなく、交流によって志気を高め、全国の劇場技術者が連帯できるようになることが連盟の目標です。

そのために初日終了後に、楽屋において500円会費のワンコインパーティーを開催しました。これは、気楽で本音を語りあうことができやすいようです。

本講座は、受講者に近い立場の現役の劇場技術者が講師を務めることで、身近な基本技能や実体験を丁寧に指導できる体制をとりました。
(担当・八板賢二郎)

◎都城市・劇場技術者技能検定

2009年2月25日～26日、宮崎県・都城市ウエルネス交流プラザ(ムジカホール)で開催しました。これまでなかった舞台進行の検定ということで問い合わせも多かったようで、定員を超えて45名が受講しました。主催は有限責任中間法人日本音響家協会九州ブロック、日本劇場技術者連盟と宮崎県音響照明舞台事業協同組

合の共催、会場となった都城市ウエルネス交流プラザを管理運営している都城まちづくり株式会社の協力で実施しました。

この催しを契機に各地から、この講座の開催の要望の声が届いています。(担当・出井稔師)

◆受講者からの声

- ・同じ業務でも、スムーズに効率良く仕事をする方法を学べてよかった。社会性のある団体の資格や講習会を受講することは地位確立に繋がると思う。私は指定管理者であるが、市民や利用者のニーズに的確に答えていくためにも、技術面の学習は必須なので、今後もこのような機会があれば是非、参加したいと思う。
- ・照明の考え方、音響の考え方、舞台を進めていくために必要な考え方を学べてよかったです。これからの演劇活動に役立たせていただきます。
- ・現在、舞台進行の仕事をしていますが、これからは音響と照明の立場に立って、少しでも理解していけるよう、楽しく仕事をして参ります。
- ・今後、音響や照明の方の手伝いを少しでもできるように、今回の講習を糧にして頑張ります。そのために、この講習は、すごく有効でした。
- ・受講してあらためて舞台の危険性を思い知らされました。多くの専門知識を得ることができて、参加して本当に良かったと思っています。
- ・照明器具の名前や扱い方などを教えていただき、すごく新鮮でした。かゆいところに手が届いた感じです。
- ・使用された教科書が分かりやすく書かれているので、これからの仕事に役立つと思います。
- ・この教科書を手に入れただけでもありがたいです。この教本を読み返し勉強していきたいと思っています。
- ・いままで自分がやっていた仕込み方法よりも効率の良い方法を学べて良かったです。
- ・ひとに伝えるということの難しさが分かりました。日々の仕事に活かしていきます。
- ・日々の仕事を見直す良い機会になりました。講師の方々のお話は、とても丁寧で分かりやすかったです。この資格を生かし、より良い舞台づくりに励もうと思います。
- ・一人で舞台全般をこなすという趣旨に沿った解りやすい内容で良かったです。
- ・安全かつスムーズな舞台進行のためには、正しい知識と正確な技能が必要なのだと、再確認できました。これからは、そのことを頭に入れて、余裕をもって、笑顔で仕事ができるように心がけて行きます。ありがとうございました。

本連盟の検定計画は、多くの劇場技術者に受け入れられつつあります。一層の内容充実を図らなければなりません。

今回の宮崎は、東京からの講師派遣を行わず、現地の経験豊かな技術者たちをお願いしました。各地に講師を育てることも連盟の仕事です。

■劇場技術者職能キャリアアップ・プログラムの提案

現在、実施されている劇場技術者関連のさまざまな職能検定は、更新はなく、継続して当初の能力を維持している保証はありません。また、その能力は一般社会から見えにくくなっています。

劇場技術者を取り巻く環境は、日々、変化しています。したがって、職能検定等で資格を取得しても、日常の研鑽を怠っては人材として不適合です。

そこで、真面目に努力して、日常的に確かな知識と技術の習得に励んでいる劇場技術者であることを証明する制度を設ける必要があります。この制度は、劇場技術者の職能を持続させ、自らの能力を表示することで、劇場を利用する市民、イベントの主催者、劇場管理者が適切な人材であるかを選択できるようにすべきです。

そこで日本劇場技術者連盟は、時代に即した人材を確保するために、職能キャリアアップ・プログラムを設けて、会員の技能とモラルを継続的に向上させ、その実績を一般社会からも見えるようにします。

実績評価方法は、連盟主催のさまざまな研修会/イベント/プロジェクト、または連盟が認定した関連団体のイベント等に参加していただき、その内容に応じて「単位」を与えて、その単位数で評価します。そして、この評価をして公表することで、「技能とモラルの両面で信用できる人材である」と社会的な評価が得られるようにします。

評価は、日本劇場技術者連盟会員証に表記し、呈示できるようにします。

以上のことについて、北海道の坪田会員と宮崎県の隈元会員に参加していただき検討したところ、単位数を下記のように案を作成しました。新年度から実施したいと考えておりますので、ご意見等をお寄せください。

●単位列(案)

- ・対象研修会 1日 1単位
- ・対象研修会 2日 2単位
- ・対象研修会 3日 3単位
- ・対象イベント参加 1単位
- ・連盟プロジェクト参加 3単位
- ・連盟研修会またはイベントの企画担当 3単位
- ・講師またはインストラクタ担当 10単位

発行 日本劇場技術者連盟
発行人 齋藤 譲一
編集人 八板賢二郎
発行日 2009年3月10日

幕内瓦版 第六号

発行 日本劇場技術者連盟

■はじめまして、大澤実です。

私は、苫小牧市民会館に勤務しています。このたび、日本劇場技術者連盟に入会させていただきました。舞台の仕事に携わって、21年目に入りました。

舞台という仕事場に関わって音響を中心に仕事してきましたが、平成18年4月より指定管理者制度により私の勤務する会社も指定管理者としてホール業務、管理業務を行っている状況です。今回は、非公募による選定でしたが、次期選定には公募による選定になってきます。ますます市民サービスへの意識をしっかりと持ち市民のための会館運営を考えていき、市民に喜ばれる管理者でなければならないでしょう。

まだまだ、舞台技術者の意識も思ったほど高まってなく、舞台業務以外にも自分達に関わる業務を積極的に行えるよう、業務環境を整えていかなければなりません。いっぺんには良くなれないでしょうが、少しずつ意識改革できればいいと思います。

劇場技術者連盟の趣旨には賛同できるのでこの連盟の中で会館運営も含めて舞台技術等を高めていけるように活動させていただければと思います。よろしく願いいたします。

■めざせ！創造する劇場技術者

映画「ザ・ローリング・ストーンズ シャイン・ア・ライト」の研究会の報告

8月31日、台風直撃という悪天候の中、参加していただいた熱心な会員の皆様と共に、ローリングストーンズの映画を鑑賞しました。このイベントは、ストーンズの仕事ぶりを見て、創造する劇場技術者として何かを汲み取ろうという趣旨で開催しました。

参加者からは、次のような感想が寄せられましたのでご紹介します。

『超一流のエンターテインメントは、すごい一言ですね。無条件にすごい、圧倒的なパワーを感じます。さらに、それを表現する映像の作り方もすばらしい！！迫力があります。オープニングからいきなりトップギアに引き込まれました。また、ラストのアップから超ロングの空撮のような広大な空間画面も圧巻でした』(抜粋)
『後半のインタビュー場面で、インタビュアーが「ギャラ以上の仕事をやっているね」と言っていますが、前半を見ていて私もそう感じていました。そのように見せることがエンターティナーの仕事でありますし、それでこそ観客は入場料以上のものを見たと思ってくれるんだと思いました』(抜粋)

辞書には「エンターテインメント＝人を楽しませるもの」とあった。それを教えてくれる映画でした。

一般社団法人日本音響家協会・東日本支部の共催、松田通商株式会社の協賛で開催いたしました。

■劇場技術者検定講座、大阪開催

この講座は、2009年7月27日～28日、貝塚市文化振興事業団の共催、一般社団法人日本音響家協会後援のもと、貝塚市民文化会館・コスモシアターで開催され、受講者から好評を得て終了しました。

第一種を14名、第三種を5名が受講し、修了後に実施した筆記試験で審査されて全員が合格しました。

講師とスタッフは以下のとおり。

照明：皿袋誠路（ピーシーウエスト）

音響：前川幸豊、浅原雄治（日本音響家協会）

舞台：小澤健二（ピーシーウエスト）

座学・コーディネート：山形裕久（貝塚市文化振興事業団）

進行：高橋三十四（桶川市民ホール）

アシスタント：長曾 誠（貝塚市文化振興事業団）

広報・記録：堀 祥代（貝塚市文化振興事業団）

受講者の感想文を読むと、この講座の実施趣旨が高く評価されているようです。

◎受講者の感想

《第三種受講者》

・これまで、いろいろなセミナーを受講してきましたが、このセミナーは実技の割合が多く、充実感がありました。市民劇団は、それぞれ得意分野を役割分担して、安価に活動すればよいと思っていたが、今回、音響と照明の技術支援を受けたら、一味も二味も違う演劇になるなあと思感した。関係者にこのセミナーを広めたい。

・プロの一種とアマの三種で同じ講習を受けさせ、基準の違う筆記試験を実施して、別々に認定するアイディアは秀逸だと思います。舞台芸術創造への市民参加に寄与する画期的な試みではないでしょうか。

《第一種受講者》

・このような講習会は、とても貴重だと思います。照明に関しては初心に戻って聞くことがで、

舞台、音響については日頃、学ぶ機会もなかったのが新鮮でした。

・とても勉強になりました。基礎を学ぶことができ本当によかったです。普段では分からない別セクションの知識を学べ、たくさん驚いたり納得したりもしました。

・普段は照明の仕事をしているので、この機会に音響の世界に触れることができ、とても勉強になりました。

・舞台操作の仕事を中心にしているので、照明や音響の専門的知識を身に付けることができよかったです。これからは他の部署を見る目も変わってくると思います。

・日頃、会館の打ち合わせの際に、照明や音響のことを尋ねられて困っていましたが、これで自信を持って答えられるようになり安心しました。

■劇場技術者職能キャリアアップ・プログラムの実施

劇場技術者を取り巻く環境は、日々、変化しています。したがって、職能検定等で資格を取得しても、日常の研鑽を怠っては人材として不適合です。

そこで、真面目に努力して、日常的に確かな知識と技術の習得に励んでいる劇場技術者であることを証明することにしました。

この制度は、劇場技術者の職能を持続させ自らの能力を表示することで、劇場を利用する市民やイベントの主催者または劇場管理者が、適切な人材であるかを確認できるようにするものです。

実績の評価方法は、さまざまな研修会やイベントまたはプロジェクト等に参加した者に対して、その内容に応じて「単位」を与えて、その単位数で評価します。

そして、この評価を公表することで、「技能とモラルの両面で信用できる人材である」と社会的な評価が得られるようにします。

取得単位は、日本劇場技術者連盟会員証に表記いたします。

●対象

第一種および第2種劇場技術者資格取得者した連盟の会員、会友

●単位

- ・1日の研修会またはイベント 1単位
- ・2日の研修会またはイベント 2単位
- ・3日の研修会またはイベント 3単位
- ・連盟主催のプロジェクトに参画 3単位
- ・連盟主催の研修会またはイベントの企画担当または講師 3単位

●単位獲得は会員の自己申告とします。

「研修会等の名称・実施日時・内容概略・当日の参加者の概数」を明記して連盟本部に申請してください。なお、連盟主催のものは連盟で把握できますので、申請する必要はありません。申請の都度、内容に準じた単位を連盟会員データベースに登録加算させていただきます。単位を更新された会員の会員証は、毎年1回更新します。

●申請先

teec@pure.ocn.ne.jp または 189-0085 東京都練馬区早宮 1-27-19 日本劇場技術者連盟

■委員募集

本連盟は、会員が自ら動き、自分たちの手で運営いくこととしています。誰かがやってくれるのではなく、自分の得意分野で、連盟の運営をお手伝いいただきたいと思います。そのことが自己啓発になると確信します。その方針を成し遂げるために、次の委員を募集します。奮って応募してください。teec@pure.ocn.ne.jp まで。

●会報編集委員

本連盟発行の「幕内瓦版」に各地からのニュースや世間の出来事を掲載していきたいので、各地からお便りを寄せていただく編集委員を募集します。

●劇場技術者報酬基準委員会

長いこと舞台技術者の地位確立を叫びが続いていますが、私たちの報酬の妥当な基準を示さなければプロとしての目標が定まりません。

ただし、協定報酬なるものを掲げることは出来ませんので、本連盟が受託する仕事の料金リストとして掲示します。

そこで本連盟は、舞台進行、舞台照明、舞台音響の報酬基準を策定することを考えています。まとめ役となる委員を募集します。

●劇場技術者職能キャリアアップ・プログラム委員会

この制度を充実させるために、各地区の委員の増員を図ります。ご応募ください。

■理事長の書籍を会員特別価格で販売

日本劇場技術者連盟理事長・齋藤讓一氏の著書を会員の皆様に割引価格で販売させていただきます。

9月30日までの間、割引予定部数に達するまで、1冊2,000円（消費税込み）で販売させていただきます。

お申し込みは、teec@pure.ocn.ne.jp（連盟）までお願いします。ご住所は、ビル・マンション名、フロア・部屋番号も明記してください。

発行	日本劇場技術者連盟
発行人	齋藤 讓一
編集人	八坂賢二郎
発行日	2009年9月10日